

楽譜を読み取る力を育てる歌唱活動についての研究
～学習指導要領における〔共通事項〕に着目して～

教科・領域教育学専攻
芸術系コース（音楽分野）

M10207H

山口 未来

1. 研究の動機と目的

平成 20 年 3 月に告示された小学校学習指導要領の改訂によって〔共通事項〕が新設された。〔共通事項〕とは「音色、リズム、速度など音楽を特徴付けている要素や、反復、問いと答えなどの音楽の仕組みを聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさなどを感じ取ること、「音符、休符、記号や音楽にかかわる用語」を、音楽活動を通して理解すること」と示されており、表現及び鑑賞の各活動の中で共通した内容として扱われるものである。これらは音楽に親しむうえで支えとなる基本的な能力であり誰にとっても必要となるものである。

筆者は過去に、「ト音記号」の意味が分からない大学生がいると聞き、小学校で既習済みである学習内容でさえ理解していない場合があることを知った。音楽を表現するには、楽譜を読み取ることによって曲に対する興味・関心を高め、曲想や曲の構造を捉えることも求められる。また、楽譜からより多くの情報を読み取るには、音楽にかかわる用語を知識として正確に身に付けておかなければならない。そのためには、楽譜を活用して効率よく理解させることができるような指導をすることが求められる。児童がこのような指導を受けることによって、楽譜を通して音楽の読み取りや理解が可能となり、それを音楽として表現する能力を獲得することへとつながっていくと考えられる。では、教科書に記載されている音符や記号などを、小学生の段階で知識として身に付けさせるにはどのような指導をすればいいのだろうか。また、そこから楽譜を読み取る力は、どのように育てることができるのだろうか。

そこで本研究では、〔共通事項〕の内容に着目した歌唱活動を通して、児童に楽譜を読み取る力をより適切に身に付けさせるには、どのような指導をすればいいかを研究していきたい。ここでは、楽譜を読み取る力に重点を置くため、〔共通事項〕のイに示されている、音楽にかかわる記号や用語を中心として考察していくものとする。

その方法として、まず、教科書を出版している 3 社の歌唱教材の取り扱いを比較する。そこから、歌唱教材における音楽にかかわる記号や用語について、実際どのように教科書の中に取り入れられているかを知ることができる。次に、小学生と大学生を対象にアンケート調査を行う。このアンケートの結果から、小学生と大学生それぞれの音楽に関する知識や能力の実状について把握し、歌唱活動における実状と照らし合わせて考察する。さらに、その結果を参考にして、音楽にかかわる記号や用語に関する知識を身に付けさせる歌唱指導を実践していく。

音符、休符、記号や音楽にかかわる用語に対する理解を深めていくことで楽譜を自主的に読み取ることに興味が高まり、表現に対する意欲が生まれると考えられる。このような過程の中で、児童が音楽を通して表現する能力を育てる指導方法を探究する。

2. 論文の構成

はじめに

第 1 章 小学校学習指導要領による概論

第 1 節 〔共通事項〕とは

第 2 節 歌唱活動の取り扱い

第 3 節 〔共通事項〕と歌唱活動の関連性

- 第2章 アンケート調査について
 - 第1節 アンケート調査の目的・方法
 - 第2節 アンケート調査の内容
 - 第3節 大学生アンケート調査の結果・分析
 - 第4節 小学生アンケート調査の結果・分析
 - 第5節 大学生及び小学生へのアンケート調査についての総合的な考察
- 第3章 アンケート調査及びインタビュー調査に基づく実状
 - 第1節 教員へのインタビュー調査の目的・方法・内容
 - 第2節 教員へのインタビュー調査による小学生の実状
 - 第3節 アンケート調査及びインタビュー調査に基づく歌唱活動の実状
- 第4章 分析結果に基づく歌唱指導の授業実践
 - 第1節 授業実践の目的・方法
 - 第2節 授業実践の内容・分析
 - 第3節 授業実践の考察

おわりに

3. 論文の概要

本研究では、小学校学習指導要領における〔共通事項〕のイで示されている「音符、休符、記号や音楽にかかわる用語」に着目して、児童に楽譜を読み取る力を適切に身に付けさせる歌唱活動について考察した。その研究の糸口として、現在の大学生が身につけている知識や能力、音楽に対する好感度などを調査し、それと対応する形で現在の小学生が身につけている知識や能力、音楽に対する好感度などを調べることによって、大まかなながらも学校教育における音楽の学習とその成果についての因果関係を類推することができるのではないかと考えた。実際に、大学生と小学生が音楽に対してどのくらい興味・関心を持ち、楽典的知識をどのくらい身に付けているのかを把握するために、大学生、小学生それぞれにアンケート調査を実施した。さらに教員へのインタビュー調査を実施し、指導者の立場から見た現状とその現状における指導状況について把握した上で、調査の結果を分析・考察した。

一般的に音楽に対する関心はとても高く、日常生活に音楽活動を取り入れようとする姿勢が伺えた。とは言え、歌唱活動に楽譜を読み取る作業が含まれると苦手意識をもつ傾向があるように思われた。大

学生と小学生それぞれの男女比を観点として考察すると、大学生の男女間で音楽が好む割合に差はなかったが、小学生の男女間で音楽が好む割合には大きな差が見られ、第5学年を起点として音楽を好まなくなっている。一方、大学生の音楽の知識や能力について見てみると男女の間に大きな差があることが認められた。それによって小学校高学年頃の音楽に対する好感度が大学生になってからの音楽の知識や能力に大きな影響を与えるのではないかと推測することができた。

これらの結果を踏まえた上で歌唱指導を実践した。楽譜を用いて、既習済みである内容は発問で取り上げ、まだ学習していない内容は名前と意味を説明し、毎回発問として復習した。練習を重ねる度に発問に答える児童が増え、またリズムを感じ取らせ、曲の情景を想像させることで曲に合った表現ができるようになった。実践後の音楽の授業においても、音符や休符に関する発問に答える児童が増え、知識として身に付いている様子が見られた。今回の実践では、音符や休符、記号を理解することで、曲のフレーズを意識することができ、曲に合った速度やリズムを感じ取ることで、より楽しそうに歌う表現につなげることができた。これらのことから、〔共通事項〕に着目して楽譜を読み取る力を身に付けさせることが、児童の知識と音楽能力を育て、実際の音楽において豊かな表現を生み出すことにつなげることができると分かった。

本研究において小中学校の9年間を見通し、知識を理解させるだけでなく表現に生かせるように、継続的な計画を立てることが必要であると考えられる。児童の実態などを考慮して、〔共通事項〕を関連させ、より効果的な授業展開をしていくことが必要であると分かった。

主任指導教員 竹内俊一
指導教員 野本立人